

第 202 号

発行

徳島ペンクラブ

1967年（昭和42年）創刊

令和7年9月21日 於県立文学書道館1F

本年度のとくしま随筆大賞表彰式が表記のとおり執り行われました。受賞された皆様、誠におめでとうございます。今回も多くの素晴らしい作品が応募され、心を籠めた審査の結果、各賞を決定いたしました。なお受賞作品は、徳島ペンクラブ選集PART43に掲載されます。今回の受賞を機にますます研鑽され、徳島はもちろん、より広い世界に向かって雄飛されることを期待致します。

天竹 勉 様

まつむら
松村
もとこ
就子
様

○佳作

「砂時計」
大塚 達也 様
おつか たつや

「恋人以上恋人未満」
割石 禮子様

「先生、僕はあの時、怪我をして……」

「ふるさとの山……」
ささの 篠野 きんこ 欽子 様

「親愛なるばあちゃんへ」

ちょうらく
けんじ
長楽 健司 様

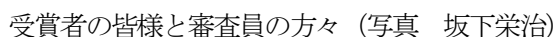
依岡隆児 徳島ペンクラブ会長 徳島大学総合科学部教授

柏木康浩 徳島新聞社生活文化部記者

鳴門教育大学大学院准教授 大樹 構

竹内菊世「飛行船」主宰（敬称略しました）

おめでとうございます!!



○令和7年度県民文化祭2025年11月2日 於県立文学書道館1Fギャラリー

主催 徳島ペンクラブ

後援 徳島新聞社・四国放送・徳島県立文学書道館・徳島県民文化祭開催委員会

徳島ペンクラブの本年度の県民文化祭のテーマは、新聞記者の目で見えた本県に関する文学作家の姿とその文学作品について、講演と対談を通して再考、再認識しようとした企画です。長らく徳島新聞社において文化部記者を務められ、作家とくに本県が誇りとする瀬戸内寂聴氏に關しての御造詣が深く、その他たくさんの方々に關する著述をされておられる柏木康浩氏に講演を依頼いたしました。また本会会長であり、徳島大学総合科学部教授の依岡隆児氏との対談を通して、徳島県の文学の実態に迫ろうと企画し、これまでの徳島県出身の文学作家に關するエピソードにユーモアを交えて話し合つて頂き、有意義で楽しい秋の一時を堪能致しました。

第一部 講演 「記者が見つめた徳島の作家と文学」

講師 徳島新聞生活文化部記者・「生誕100年 瀬戸内寂聴物語」著者

柏木 康浩 氏

徳島県出身あるいはゆかりの作家のうち、瀬戸内寂聴、生田花世、モラエス、野上 彰、北條民雄の五作家に絞つて、パワーポイントによる映像を前に、エピソードを交えながら、有益な講演を堪能させていただきました。

第二部 対談 「徳島の文学と未来」 柏木康浩氏 / 依岡 隆児氏

徳島県出身あるいは所縁の文学作家は意外と多いが、県民性の所為かどうか、その作家の方々の顕彰に、他県と比べてあまり積極的でない傾向がみられる。他県を参考に、もつと当県出身作家はもちろん、当県ゆかりの作家の書を読む機会をつくり、当県を誇りとすると同じく、当県ゆかりの作家を県民の誇りとして称え、その文学について語り合うことが大事であり、それが新たな作家を生むことになる。—とのお二人の対談でした。

（尚、本県民文化祭のダイジェストは、坂井 陽氏筆により、『徳島ペンクラブ選集 Part 43』に掲載されます。ぜひ一読ください）

○小説家 森内俊雄 文学碑建立にご協力よろしく。

小説『眉山』で知られる森内俊雄氏は、ご自身は大阪市生まれですが、ご両親が本県出身で、戦時下徳島に疎開しながらも空襲に遭い、危うく眉山に逃げて助かり、

そのことを文にしたのが小説『眉山』です。それ以後、五回にわたり芥川賞にノミネートされた徳島県ゆかりの作家です。彼はこよなく徳島を愛され、そのことは、『随筆「みちしるべ」』に存分に書かれています。このように第二の故郷として徳島を愛した小説家森内氏の顕彰碑を、ゆかりの深い眉山に、でき得れば眉山山頂に建立致したく、鋭意計画中です。実現に向けて、皆様方のご助力、ご支援を心からお願い申し上げます。尚、具体的に計画が確定いたしました際は、別途連絡申し上げます。

○新しい会員をご紹介します。

この度、当会に、新しくお二人がご入会されました。心より歓迎申し上げます。自由に伸び伸びと文芸にご精進、ご活躍ください。

溝渕 吉弘 様 香川県高松市ご在住（鈴木綾子副会長紹介）

中本 祐子 様 徳島市ご在住（ホームページより自薦） 俳句他

○とくしまペンクラブ賞のリフォームについて。

徳島ペンクラブ賞は、各年度の『徳島ペンクラブ選集』に掲載された一般会員作品の各部門（散文部門・韻文部門）の中から、会員の投票により選出された作品に授与される賞です。文芸高揚の一助として、この賞の形をどのようにすれば最適か、絶えず検討を加えて改善に努めております。この度、各部門の1位・2位を選出して表彰する形態を採るようになりました。実情に即した最良の形にするべく、今後ともいろいろと試行錯誤を致して参ります。ご期待ご協力ください。

このうち、散文部門に限り、ペンクラブ賞受賞作品は、徳島市の文芸集『まゆやま』（徳島市文化協会発行）に掲載されます。

○受賞おめでとつございます。

本会会員の方々の文芸コンクールにおけるご栄誉をお祝い申し上げます。
徳島県俳句連盟主催
徳島県俳句連盟第62回大会（発表&授賞式は10月12日）

徳島県知事賞

山之口ト一 様

徳島県俳句連盟賞

新開 英毅 様

第41回「小さな親切」はがきキャンペーン
読売新聞社賞

渡辺 恵子 様

秋の文学散歩

令和7年10月5日

今年の秋の文学散歩は徳島市渭北地区（吉野本町、下助任町）の三寺院散策という形で十月五日に実施されました。心配されていた雨にも降られず、曇りの過ごしやすい天気となり、ペンクラブ会員十一名、ひまわり俳句会七名、まちライブラীবイブリオとくしま三名の総勢二十一名が参加しました。



はじめは当日の集合場所万福寺でペンクラブ会員でご住職の福島誠浄さんの講

話を拝聴しました。万福寺境内に井原西鶴の『好色五人女』の題材となった八百屋お七の霊を慰めるために相手の吉三が建立したという「お七地蔵」があります。が現在の「お七地蔵」の供養塔は二代目のお地蔵さまで1982年（昭和57年）ご住職の退職金にて再建されたものだそうです。元々のお七地蔵は昭和20年6



月すべて戦時下の供出でなくなつたとのことでした。

また境内には明治100年記念に1872年（明治2年）

「庚午事変」の指導者を含めた4人の切腹した若者を偲んで建立された碑があり、日本史上最後の切腹だったとのことでした。次に「三太郎大明神」

として祀られている阿波の豆狸に話が及びました。この狸は実在の狸でご住職の祖父（先代住職）がよく裏のお墓で遊んでいたのをみたそうです。その後この狸のお骨が見つかり祀ったのが今に至っているとのこと。11月3日に祀ったのをきっかけに「阿波の狸祭り」が始まったとのことでした。その他にも台湾の仏教団との間のエピソード、俳人のおじい様、写真家で徳島新聞の写真部長をされていたおとう様が菊作など多岐にわたるお話頂きました。



その後、七曲の道を通一行は興源寺へ徒歩にて進みます。下助任町にある臨済宗妙心寺派寺院の興源寺は阿波藩主蜂須賀家の菩提寺である。家祖蜂須賀正勝は別区画にあり、藩祖蜂須賀家

政から13代斉裕までの墓所が並び、中でも忠英の墓石は高さ4、2メートルもあり、全国屈指の規模とのことでした。墓所が林立する周辺一帯は助任緑地・蜂須賀興源寺墓所として一般公開されています。車通りから離れているのであまり知られていない場所ですが、ちょっとした散策にも良い場所かと思えます。「灯台下暗し」で地元も歩いてみるといろいろな発見があります。文学散歩を企画してくださった西池様、本当にありがとうございました。

文 増田裕子様
写真 坂下栄治様

ひとりごと欄（眩きに感慨あり）

はじめまして！ 清洲 吉弘

高松から古い乗用車を走らせ、自動車道・大坂峠のトンネルを抜けると遠く吉野川平野の奥に眉山が見えてきます。子供の頃に住んでいた大麻町板東あたりから大谷、撫養方面へと東進し、自動車道が大きく右に曲がって南進し始めるころには、眉山は、標高が倍以上ある中津峰・旭が丸などを背景として見えてきます。

上板町七條で生を受け、板東、鷺敷、北島、脇町を経て佐古に一時居住、城西中学から阿南高専へと進学した私にとつて眉山など阿波の山々はとても懐かしい存在です。21歳から69歳まで、香川県内を転々として働いてきました。が、58歳からは都内の通信制のある大学の文学部に籍を置いて歴史を再び学び始めました。そして徳島市内の本屋で「阿波の歴史を小説にする会」の小説に巡り合い、さらに「徳島ペンクラブ選集」に辿りついたのです。この度、皆さまの仲間に入れて頂くことになりました。どうか宜しくお願いいたします。

今夏、不思議な「縁」があり、中学1年時の担任の先生が書かれた阿波の歴史小説『芭蕉を夢見た男』に巡り合いました。私が中学1年生だった年は、昭和44年ですが、父が3月の異動で脇町に転勤することになり、私は進学するはずだった北島中学ではなく、吉野川の中流域にある歴史と伝統のある脇町中学に進学することになったのです。

仲の良かった友達と別れることでシ

ョック状態であったのですが、担任の先生は、若くて綺麗な先生であり、小学校の中・高学年時に、男の先生ばかりが担任であった私はドキドキしながら中学校に通うことになりました。

昭和44年は、前回の大坂万博の1年前の年であり、アポロ11号が人類を月に到達させた年でもあり、とても賑やかな年でした。担任の先生は、少しクールな感じで、中間・期末などの試験の結果（順位）を、前回と明確に比較して返してくれるのです。幸い一度も順位を下げることなく1年生を終えて進級したのですが、家の都合で夏休みにまたまた転校することになってしまいました。

担任の先生とは、僅かな「縁」でしたが、今夏、先生が書かれた歴史小説に出会った不思議さを、ここで「ひとりごと」てみました。徳島ペンクラブに入れて頂いて間がありませんが、「はじめまして」宜しくお願い申し上げます。

八丈島に旅してー其の1ー

八丈島と宇喜多秀家 東條 孝

岡山城主・宇喜多秀家は豊臣秀吉の寵愛を受け、「秀」の漢字を頂くほどの臣下であった。関ヶ原の戦いで家康に負け、冬の陣、夏の陣でも押され続け、秀家は薩摩あずかりとなった。島津家、前田家と妻・豪姫の懸命なる嘆願により助命され、一六〇六年に「八丈おくり第一号」として島の土を踏んだ。しばらくすると刀を置いて鎌を持つては畑を耕し、太平洋の荒波が寄せては引く潮の干満に心を寄せては竿を投げて漁をした。（以下 次ページ）

自ら薪を集めて火を焚いて、野菜を煮込み、魚を炙っては自然とともに生き続ける。城主の座を追われる不自由があったにせよ、転居や職業を選択できない時代に、高い空を仰ぎ、農林漁業から味わう春夏秋冬の控えめな生き方に、日々満たされていった。その後、幕府への赦免願いを薦められても「その考えはない」とピシヤリと断った。大砲が放つ煙に覆われる中で、刀を振り回した合戦や、植え付けも収穫する喜びもない年貢米を頂くだけの武家社会の虚しさは何かを感じていたのではない。江戸よりも一〇度も高い温暖な島民生活五〇年、多難と平穏が交錯した八四年の生涯を生ききった。流人たちとともに眠る慎ましき墓石近くには雨にうたれる明日葉がうなずく様に揺れていた・・・

リレーエッセイ



モルフォ蝶の話

伊丹悦子



青ムラサキに光る蝶が翅を開いて、わが家の廊下の壁に張り付いている。真夜中に見ると更に神秘的だが、この蝶たち、実は額縁の中で身動き一つ出来ない。数えてみれば数十羽の、色とりどりの翅が寄せ集められている。もう三、四十年も前になろうか。若い頃ブラジルに移民していたトシさんからいただいたものだ。わたしは「ブラジルの蝶」と呼び、大切にしていたが、一方では、閉じ込められたこの蝶たちを何とか広い世界へ解放してやれないものか、と思いつつ続いていた。そんな折、こんな詩ができた。

―夜目にも碧い蝶の翅 瞬きひとつでひらひらと飛びたつでしょう 額ぶちの中からいつせいに 希望のように舞い立つでしょう(中略)硝子ケースにはめ込まれるかな旅の思い出に ぶらじる土産の色とりどりの翅 翅 翅 その文様の 仮装の目玉よ何を見つめる―(中略)―そんなもんで 貧しい蝶捕りたちはみな哀しみの鱗粉でひたひたひたと 眼を病んだ (『ブラジルの蝶』より)―この詩が活字になった折に、

フとについて、紙上に乗せてできるだけ遠くへ飛ばせてみた。すると何処まで飛んで行ったのか、未知の方から思いがけない便りが届き、「翅に目玉模様があるのなら、それはモルフォチョウでしよう」と教えてくださった方が居た。

また別の方は「その蝶はいつかどこかで見たことがある。再び出会えて嬉しい。そしてまた「蝶は靈魂だ。お盆には帰ってくる」、などという便りもいただいた。蝶たちを、何かのかたちで解き放すのがせてももの供養だと思っている。美しい蝶たちよ、もっともっと広い世界へ飛んでゆきなさい。

「蝶採りたちは皆、眼を病んだ」と、これはトシさんから直接聞いた話だが、日系移民が多かったブラジル、サントスとはどんな所だろう。現地での生活は、言うにいわれぬ苦勞があったとのこと。あの時もつと色々聞いておけばよかった。そのトシさんも、今はもう靈魂となられた。いまごろは身軽になって蝶のようにどこかを飛んでおられるだろうか。

ほんの散歩道

『アフタースクール』

作者の第3詩集。出版元・あゆみ書房は著者の娘で作家の中村あゆみさんが起ち上げたひとり書房。

表題作「アフタースクール(放課後)」は、抱えきれない悩みを消化できないまま社会に出て行った教員たちへのエールのような響きを持つ。これからも続くお互いの人生の放課後。肩肘張らず、生きていくこと大切さと呼びかけている。

(徳島新聞「出版話題」より転載)

変形A5判105ページ
定価本体1500円＋税
著者 竹内紘子
発行 あゆみ書房



絵本『十二支のかきぞめたいかい』

十二支の漢字知っていますか？

十二支の漢字書けますか？

ペンや筆を持って字を書く楽しさを伝えたいと思い、この絵本を制作しました。新しい年が幸せになることも願っています。十二支の辞書代わりに手元に置いていただけたら嬉しいです。「山崎双花」は私のペンの雅号です。絵本を描き始めてからペン習字を習い出し、日本ペン習字研究会の師範を取得しました。絵本の中の書は、私自身が筆を持って書いています。どうぞ、読んで下さいますよう、よろしくお願いいたします。

版型 A5サイズ33ページ
価格 1800円

著者名 やまさきじゅんよ
絵・文

書字・山崎双発行所
出版会社 原田印刷出版(株)



(当「ほんの散歩道」欄は、徳島ペンクラブ会員の方が新たに出版された書籍を広く紹介するために掲載しております。ご出版時、ご遠慮なくその要項と表紙写真を併せてお送りください。スペースの許す範囲で掲載させていただきます)

あとがき 無鉄砲の誹りを意に介せず、当会員自らの手による本通信の企画作成を試行した時には、まだ少し若さが残っていたのだ。時代逆行ながらペンにこだわって、カソトをマウスからペンに変更してから今号で11回目となる。その間に、編集に手慣れたというよりも緊張を欠いてずばらになったような気がする。やはり複数の意見で討議しつつ、担当を交互に務め合い、風通し良く趣向を充実させて、ダイナミックな編集を志向することが望まれる。本通信がチームによる企画・編集の時期に至ったことを痛感するようになったのも、一種の進歩だろうか？ 編集子